# 六月例会発表要旨

特集

## 共同制作と私的領域

### ――戦後の同人誌・サークル活動から考える

【特集の趣旨】

運営委員会

結社や同人雑誌は明治以降、現代に至るまで様々な形で創られ、文学活動が盛んに行われてきた。本企画では、特に戦後から一九六〇年代あたりまでの期間に注目し、結社や文芸同人誌、サークル誌などを取り上げる。戦争体験を経て新しい社会の構築を目指そうとしていた時期にあって、例えば谷川雁や石牟礼道子らの活動、『荒地』派をはじめとする戦後詩誌に見られる戦争認識の問題、金時鐘らの詩誌『ヂンダレ』『カリオン』の活動、あるいは花田清輝や岡本太郎、安部公房などの夜の会などが展開していた。本企画ではこれらに見られる共同性のさまざまなあり方から、共同制作と私的領域のかかわり、そしてそこから読みとることができる諸問題について議論を深めたい。

本企画は戦後のこの時期においてどのような問題提起が人々の間に生まれ、運動としての共同制作が生まれていたかを考察することを通して、現代にも通じうる様々な連帯・接続のあり方について再検討することを試みる。現代では情報化社会が発展し、一見誰もが簡単に発言でき容易に繋がり合うことができるものの、かえってきちんと対話がなされないまま一体化を促す言説の中へと呑み込まれていく事態も、同時に現われている。そのような「公」と「私」の境界が一層曖昧になっている今、表現者が社会との関わりの中で連帯し、独自の作品を生み出すことを可能にした共同制作というあり方に注目することは、重要な意味を持つと考えられる。

表現する者たちの個別性に関わる私的領域の硬直化を避けるためにも、結社や同人雑誌、サークル活動、芸術運動など特定の人々の間で共有された言説空間と、個人の創作との関わりを問い直し、共同性と私的領域についての認識を深めたい。

## 共有体験としての文学

### ――『ヂンダレ』『カリオン』を視座に――

浅見洋子

一九五三年二月、大阪で朝鮮詩人集団が結成され、サークル詩誌『ヂンダレ』が創刊された。『ヂンダレ』は、日本共産党の民族対策部の指令を受け、在日朝鮮人青年を覚醒させるという政治的意図のもとではじめられた雑誌である。そのため、創刊当初の『ヂンダ

レ』は、金時鐘と権敬沢以外の会員は詩を書いたこともないというのが実情であった。

本発表では、同時代の東アジアの状況を踏まえつつ、『ヂンダレ』と『カリオン』を分析し、共同性と私的領域について考えたい。『ヂンダレ』初期の作品は、朝鮮戦争を背景に反戦・平和をうたった闘争詩と、日本での苦しい生活をうたった詩に大別することができる。それらは、文学作品としてかならずしも優れていたというわけではないが、「読者に〝自分も叫んでみたい〟と思わせるような喚起力」（宇野田尚哉）を持っていた。やがて文学に目覚めていくなかで会員が詩を書けなくなるという停滞期を潜りながらも、編集者として活躍を見せる鄭仁の加入などを経て、『ヂンダレ』は権敬沢・李静子・金時鐘の特集を次々と打ち出す充実期を迎える。だが、そのような共同性とそこから立ち上がってきた個別の表現が深められつつある時期に、国際共産主義運動の転換を背景に、『ヂンダレ』は内部的にも外部的にも深刻な政治的対立を抱え込むことになる。その過程で、ある時期まではのびやかに詩を書いていた青年たちの姿は消えていき、最後に残った数人が同人誌『カリオン』に結集することになるのである。

『ヂンダレ』の時代は、日本人との連帯の可能性が兆した一時期でもあった。祖国の分断、朝鮮戦争という抜き差しならない状況を生きる在日朝鮮人と、戦後空間を生きる日本人との間には、越え難い断絶があったに違いない。それでもなお、全国で展開されたサークル運動と『ヂンダレ』は、ゆるやかなネットワークでつながっていた。朝鮮人と日本人が同じ場を共有しようとした体験の記憶を呼び起こすことで、現況への抵抗の契機としたい。

## 共同制作と私的領域
### ——鮎川信夫「アメリカ」の成立に結ぶもの——

宮崎　真素美

「私はこの作品でかなり烈しく剽窃をやった」、「私は断片を集積する」。

挑戦的な告白をふくむ「「アメリカ」覚書」とともに、鮎川信夫の長詩「アメリカ」は、昭和二二年七月、『純粋詩』に発表された。ヴァレリィによる純粋詩の観念を否定することで、「生の中心」と「詩作の有償性」を立脚点とする戦後の詩作姿勢を明らかにした実践作、「覚書」はそのマニフェストと位置づけられる。そして、決定稿（『鮎川信夫全詩集一九四五—一九六五』昭四〇・九、荒地出版社）を得るまでに、約二〇年の歳月を要した作品でもある。

「アメリカ」は、その発表誌『純粋詩』における田村隆一や三好豊一郎をはじめとする同人らの詩篇と、それらを通して戦時下の詩友の詩句までも響かせる。黒田三郎は「一九四七年の詩壇と『アメリカ』」（『純粋詩』昭二二・一二）において、「アメリカ」でおこなわれた言葉の断片をつなぎあわせるといった方法は、旧来のモダニズム、シュルレアリスムの方法と相似してはいるが、言葉が個人的な体験から切り離された前者とは異なり、それらが個人の体験に基づき、所有格を切り離していないところで成り立っていることを指摘した。それは、今回のテーマ「共同制作

と私的領域」に結ぶだろう。

かつて「鮎川信夫の〈アメリカ〉――一九四七年の交響」（『国語と国文学』平五・一二、『鮎川信夫研究――精神の架橋』平一四・七、日本図書センター所収）において、彼らの詩句の交響や受け渡しのありようを『純粋詩』という場の特質とともに論じたが、このたび、昭和十年代初頭に中桐雅夫が出発させた「LUNA」クラブの詩誌にも、それがすでに見られることを確認した。そこで醸成された彼らの詩的関係性をもっともよく体現したと思われる田村隆一や、鮎川信夫の同人誌における特性を照らしながら、「アメリカ」成立への道程を「共同制作と私的領域」の視点から考えてみたい。

## 無名・集団の文学
### ――工作者・谷川雁とサークル文化運動

米谷匡史

一九五〇～六〇年代、サークル文化運動の工作者であった谷川雁は、「集団」のなかで主体性・感受性をくみかえ、解き放っていくことを試みた。人と人をつなぎ、前衛と民衆の断層をこえて、ネットワーク状にひらかれた集団をつくりだし、新たな表現の可能性を追求したのである。異質なものを交錯させ、「連帯」の感覚を編みなおす試みのなかで提示された、無名・集団をめぐる問いを再検討したい。

一九五〇年代には、サークル文化運動や現代詩の領域で、集団と個のあり方が問われていた。一方では抵抗詩の隆盛のなかで社会連帯を掲げる詩人たち、他方では個の詩的感動を研ぎ澄ます詩人たちがいた。谷川雁は、熊本・阿蘇・水俣のサークル運動をつなぎ、やがて筑豊に拠点をおいて、九州各地のサークルを横断する雑誌『サークル村』を創刊する（一九五八年）。その文化運動は、たんに個人が思想・文学をうみだすのではなく、人と人の間をつなぐ工作という行為自体が、別の表現をうみだす触媒となる可能性を探るものであった。「思想は私有されるものだという呪縛」からの解放がめざされ、「思想の無署名性」こそが賭金となった。

本報告では、主に『サークル村』創刊の前後に書かれた一連の「工作者」論・「集団」論を再読したい。それは、思想・文学の私有感覚を破壊し、「複式の自我」による表現を模索するものであった。しかしその試みは、既存の共同体による閉鎖的な占有感覚や、前衛（党）による統制（全体主義的な集団主義）の力と抗争しながら、さまざまな矛盾を抱えこむことになる。その狭間で垣間見られた、無名・集団の文学の可能性について考えたい。